

自給飼料作り体験記

自給飼料養豚にメド

(I) 「混合方式で二割も収益増」

宮城県小牛田町 関野 洋

宮城県小牛田農林高校農業クラブ飼料作物研究班では、昭和三十七年四月から三年にわたって、自給粗飼料による養豚の経済試験を行なった結果、このほど資料がまとまりましたので、ここに発表させていただきます。養豚経営農家の皆様の手引きになりますれば幸いです。

この試験は、苜蓿牧草であるラデノクロローバー、青刈作物のレープ、根菜類

のジャガイモ、サツマイモとツル、小岩井カブなどを一定の条件下で購入飼料に加えて豚に与えてみたもので、試験結果は配合飼料だけで飼ったものよりも約二割かたの収益増になりました。

養豚経営上、飼料を自給するか、購入配合飼料だけにするかは、飼料費がその過半を占めること、購入配合飼料だけで仕上げると、肉質が悪くなり（脂肪層が厚くなる）、買ったたかれることになりました。

しかし仔豚から自給飼料を与えること、初期成育が少々遅れますが、養豚経営全体を通して、次の点が有利であります。まず、初年度は大規模飼育向けの飼養方式―購入配合飼料だけによる一を試みた。

しかし、制限給与をしても飼料を与えた割に増体効果がなく厚脂になった。そこで二年目は配合飼料を無制限給与しながら牧草（ラデノクロローバー）を少量与える飼ひ方を対照区にし、ラデノクロローバー、レープ、イモ、カブ類を豚が必要とする蛋白質量の三〇％程度配合飼料に混ぜて与える試験区とにしました。

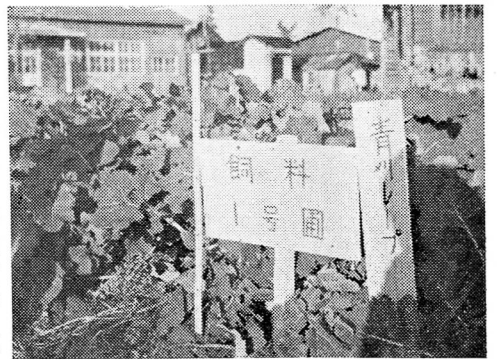
この結果、無制限給与区はたとえ牧草を与えても厚脂になりやすく、

一方試験区は多少発育が遅れ飼料効率がかんばしくありませんでした。これは仔豚の初期（体重十七キ）から始めたためとみられましたので、三年目には、仔豚の体重が二十五キになってから同様の方法を行いました。

こうすると、ほぼ期待どおりの結果が得られました。生後一九〇日で出荷した所、一頭平均千六百二十三円（枝肉キロ四百二十二円、厚脂十円引き）対照区の百二十二割増収となりました。対照区、試験区各四頭の収支をみると、豚肉代が八万六千三百八十二円に対して、八万九千六百十円、堆肥代（一ギ一円）六千円に対して、六千六百



養豚自給飼料経済試験圃（3号圃は、ラデノクロローバー牧草畑である）



レープ生育状況

二十四円で収入は、九万二千三百八十二円に対し、九万六千二百三十四円になりました。

一方飼料代も三万九千九百四十四円に対して、二万五千二百六十六円（牧草類一ギ一・三円）になりましたが、労力は七十八時間に對し、百十一時間かかり、一時間四十円で計算すると三千二百二十円に対して、四千四百四十円になりました。又動力草刈機、チェーンローバーなどを備えましたので、農具償却代が五百円に対して、二千円に増えました。

しかし、その他を合わせて、総収支は六万三千七百三十四円に対して、六万九千三百八十八円に対して、三万五千四百一十一円となり、二割増となりました。

今後の問題点としては、労力がかかることですが、この点は多頭飼育で省力化経営にすることで解消できると思います。